

ウィンドサーフィンの普及に関する研究

A Study on spread of Windsurfing

1K03B122-7 氏名 滝田 佐那子

指導教員 主査 原田宗彦 先生 副査 石井昌幸 先生

【緒言】

ウィンドサーフィンの特徴はマストが全方向に倒れる可動式で、ブームの傾斜角により風圧中心を変化させ進行方向を定めることにある。ヨットやクルーザーと比較して持ち運びが楽で、大きな身体運動が可能であり、艇速の速いことが魅力である（平野、2001）。開発から約 40 年の歴史の浅いスポーツであり、わが国日本には、1972 年と世界でも早い段階に入ってきた。以降、1984 年からオリンピック、1994 年から国民体育大会の正式種目にセイリング競技の一種として採用されている。

1970 年代は、競技人口の増加とともに急ピッチで普及が進み、1980 年代にかけて数多くの組織・協会が生まれるとともに世界大会が積極的に日本で開催された。バブル絶頂の中で巨額の賞金レース・豪華商品レースが開催され、この時期がウィンドサーフィンも絶頂期であった。1990 年代に入ると、利権やイベント、メーカーなどが絡み、複数の協会間が不安定な状況になる。バブル崩壊と共にウィンドサーフィンの人気も徐々に下降し始め競技人口も減少していくが、逆にスポーツとして世間に認められ始める。

現在、ウィンドサーフィンが抱える問題は数多い。わが国日本には多くのウィンドサーフィンの組織が存在する。その中で日本セイリング連盟が国際ルール・世界大会への派遣・全日本大会の開催を取り仕切り、中心に位置しているが、統率力はなく、多数ある組織間の関係は複雑である。この組織の未整備が、普及活動や選手の強化の足かせになっている。また、多くの選手は、所属都道府県の県連盟に所属することにより国体資金としてわずかな援助を受けるか、アルバイトなどで生活をたてながら選手活動を行っており、満足な競技活動が行えていないという問題を抱えている。その他にも、環境の未整備、指導者の不足、普及・強化へのニーズの不足など、ウィンドサーフィンを取り巻く問題は数多い。

【研究の目的】

本研究では、現在のウィンドサーフィンの実態に関するインタビュー調査ならびに意識調査から、普及・強化に関する問題点を明らかにし、今後ウィンドサーフィンをどのようにして普及・強化させていくかを検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

【研究方法】

本研究では、2006 年 10 月 28 日～29 日に葉山にて行われた第 22 回全日本実業団ボードセイリング連盟選手権大会の参加者、及び 2006 年 11 月 6 日～8 日に沖縄県国頭村にて行われた 2006 全日本学生ボードセイリング選手権の参加者を対象として、訪問留め置き法による質問紙調査を行った。その中で以下の 5 項目について質問し、その結果について分析を行った。

- ・デモグラフィック属性
- ・過去の意識と状況について
- ・現在の意識について
- ・現在の練習状況について
- ・今後の意識について

【結果】

有効回答数 144 部

本調査によって明らかになったことを以下にまとめる。

- 1) 参加開始年齢は非常に高く、大学入学後に競技を始める者がほとんどである。
- 2) 人材的な環境が良好であることが、競技の参加及び継続のための重要な要素になる。
- 3) 指導者を必要とする者が多い一方で指導者数は少ない。また、技術の向上のために指導者を求める者が多い。
- 4) 学生・社会人の今後の参加意志の比較によると、社会人は継続意志が強いが学生は低い。
- 5) 競技選手・愛好家による参加意識の違いから、愛好者は生涯スポーツ志向、競技選手は競技スポーツ志向とそれぞれの傾向を示し、2つの間には顕著な差が見られる。

【提言】

今後のウィンドサーフィンの普及・強化のためには、まず複雑な協会組織を再編成し、その上で、指導者の育成やジュニアの育成を積極的に行っていくべきである。また、愛好家や競技選手など、競技に参加している立場に見合った普及活動を行っていくことも重要である。